

シン・ジャパニーズ・ペインティング

革新の日本画 横山大観、杉山寧から李禹煥、蔡国強の作家

ポーラ美術館（箱根・仙石原） 23.07.15～12.03



[日本画]の始まりは、明治時代に政府のお雇い外国人として来日していた東洋美術史家・哲学者「アーネスト・フェノロサ」(1853～1908)が、日本国内で目にした絵画を総じて“Japanese Painting”と呼び、この英語を日本人通訳が「日本画」と翻訳したことか

ら、明治以降に「日本画」という概念が社会的に定着していったとされる。

本展は、13年ぶりとなる日本画の企画展で、多様化する21世紀のアートシーンにおいて、現在の「日本画」が如何なる可能性を持つかを探るものだ。

<本展のみどころ>

1. 13年ぶりの日本画展で、日本画の誕生から現代までの展開を紹介。
2. 課題は「革新」で日本画の表現、材料、形式の変化から歴史を紐解く。
3. 日本画と洋画はどう違う？ 同時代の洋画家たちの作品と比較する。
4. 現代の作家たちの新作も初公開し、日本の絵画の現在地を探る。



横山大観 《山に因む十題のうち霊峰四趣 秋》1940年（左）

季節や時の変化によって海を描き分けた10点と、富士をテーマとした連作の一部で、画伯の50年にわたる画業のすべてを傾けて描いた作品。

杉山寧 《孔雀》1975年（右）

画伯の数多くの花鳥画の中で、真に迫る見事な描写力をたたえ、多くの人びとに知られて高い評価を受け「芸術院賞」を受賞した作品。

